

**ペルー沈没記**  
**マチュピチュを見て死ぬ**  
**ユキーナ・富塚・サントス**

1	プロローグ 沈没とは？ .....	4
2	わらしべ長者ペルーの首都リマへ！！ .....	9
2.1	コキの家.....	9
2.2	不思議な生き物.....	10
2.3	ペルー式ダイエット.....	12
2.4	カスティリアーノ (スペイン語) とは？ .....	14
2.5	マリナーラ・バカン！ .....	16
2.6	人はなぜ踊るのか？ .....	18
2.7	ラテンの血・踊りの血.....	20
3	ペルー食べもの考 .....	21
3.1	ペルーで一番うまいもの.....	21
3.2	セビツェの知恵.....	23
3.3	家族の肖像.....	24
3.4	平凡であることの大切さ.....	26
3.5	お手伝いのススメ .....	27
3.6	パーソナルボディガード.....	30
3.7	家畜を食べるということ .....	31
3.8	病は気から、気が病むということ .....	34
4	酒とバラとコーンと・・・ .....	35
4.1	ペルーのお酒とデザート・マサモラ・モラーダ .....	35
4.2	ペルーの傾城・ペリチョリ .....	37
4.3	ペルーのイケメン.....	38
4.4	ペルーの征服者 コンキスタドレスたち.....	39
5	クスコ・マチュピチュ 大冒険 .....	42
5.1	俺んとこの田んぼ.....	42

5.2	マチュピチュを見て死ぬ.....	43
5.3	ファイトー発ワイナピチュ！ .....	47
5.4	クスコの夜景.....	49

## 1 プロローグ 沈没とは？

その昔、「日本沈没」というテレビドラマが流行った。日曜日の夜に放映があり、毎週毎週日本各地で地震が起き、日本が徐々に沈没していく・・・その危機に直面し、いかに生き延びていくかを問いかける、そんな趣旨のドラマであった。

母はこれを見て、私に水泳を習わせようと思ったらしい。「たとえ日本が沈没しても、お前はアメリカまで泳いでいけ！！アメリカまで生き延びろ！」

今から考えても、なぜ、アメリカなのか、なぜ太平洋を泳いでわたれると思ったのか、イマイチ理解に苦しむ。お陰で私は、比較的早くから河童のように泳ぐことをマスターし、水の中でリラックスするという最高のレジャーの一つを味わえるようになった。母の先見の明に感謝するといえば、感謝である。

さて、「日本」はさておき、「沈没」である。バックパッカー用語では、「沈没」を特殊な意味に使うらしい。ある場所をいたく気に入ってしまい、そこに根が生え、動けなくなってしまう状態を指すらしい。

国によっても違うのだが、ヴィザなしで滞在できるのは90日と決まっている国が多い。期限がくると国境を越えて一旦、隣国に行き、また当国に戻ってきては90日滞在するというのを永遠に繰り返す、そのうち気づいたら、はっ、二年三年が過ぎてしまった・・・ということが往々にしてあるらしい。

うっかり住み着いてしまうこと、これを「沈没」という。

なぜこれを書くのか？

私も、このようなバックパッカーと同様、うっかり南米に居ついてしまったからである。

忙しいとは、心を亡くすと書く。

この数週間、12月の末から1月半ばの自分は、死ぬほど忙しかった。ミラノからアジアの国々を回るべく旅にでていた。地理的な移動が多い、これだけでもかなりハードである。少なくとも普通の30代の女がやることではない。

ヴァウチャーを送って私を泣かせたドイツの銀行からは、いまだに回答が無かった。私が採用されるかどうかは、いまだに不透明。イラつきが次第に募っていた。

根無し草とはよく言ったもので、ニューヨークのアパートを出てからの自分は、まさに住所不定、根無し草状態であった。ミラノの知人宅に荷物を預けてはいたものの、当該知人宅に住み付く訳にはいかなかった。相手の状況は察しがついたし、どこにいても居候としての自分の立場は肝に銘じておかなければならない。

本命の会社から結論を待たされている以上、日本に帰るわけにもいかない。ほぼ50%程度の確率で、この先ロンドンにしばらく住む可能性がある以上、ヨーロッパ、アメリカでの職探しもできない。けれどもここ、ミラノに定住の先はない。

こんなハズではなかった、ということは良くある。何事も、得てして自分の思い通りにはいかないものである。その程度とインパクトが時として異なるだけである。多くの人は、これを「挫折」と受け止めるかもしれない。

私は、よく人から、楽天的、バイタリティーの塊といわれるが、私にもこの程度の挫折というものはあるのである。けれども、他に考えることがいろいろあるので、比較的重要度の小さいものには注意がいなくなってくるのである。さらには、こんなハズではなかった状況をいつまでもグジグジと考えていないのが、私の最大の長所であると思っている。

さて、今回も、このニッチもサッチもいかない状況を前向きにとらえるようにした。就職活動も、定住もできないのであれば、やることは一つ。遊牧民のようにさまようことである。元来ボヘミアン体質の私である。行き先に迷いは無かった。

絶対に行こうと決意していた南米に、まよわずデスティネーションを絞った。

それほど遊んでもいない東遊記が終わる前に、早速チケットを手配した。

余談だが、旅行というのは、企画段階から楽しいモンである。

まだ行ったことのない国に思いを馳せ、情報を集める、ベストシーズンはいつなのか、お祭りはあるのか、必ず行くべき場所、見るべきものは何かなどをチェックする。その後が行程作りである。エアー、内部の移動手段、ホテル等々旅を具体的にしていく。

知らない語学を勉強し、情報を集めるうちに徐々に、旅の気分が盛り上がってくる。よし、いくぞ！という気合が絶好調になった時点で、実際の旅立ち・・・というパターンが望ましい。

しかし、今回はいかんせん時間が無かった。メチャメチャ忙しかった。ミラノに、たった数日間、わが身を置く場所の確保もままならなかった。めぼしい滞在先をすべて当たっても断られた。ミラノの滞在日数は必要最小限にしなければならない。

まさにボヘミアンであった。

ブリュッセルのホテルから、南米行きの航空券のチケットを取る、相手会社（ドイツの投資銀行）から、採用の通知が来ることを考えて、帰りのチケットは3週間後にした。けれども50%の確率で起こる、バンザーイ！ナシヨ・・・の状態（不採用ということ）に備えて、変更可能のチケットを買うことにした。